

デーリー東北

2023年(令和5年)2月14日(火曜日) (17)

私見 Tuesday 創見

で、襦袢とも言う。寒さの厳しい地方では襦袢と同様、夜着や寝具としても用いてきた。調べてみると、丹前は関西風の呼び方らしいのだが、南部地方で生まれ育った私に

押し入れにめったに開けない大きな行季がある。中には、祖母の形見として遺された手作りの丹前が入っている。丹前と聞いてもピンとこない方が多いかもしれない。厚く綿を入れた防寒用の長着

は、丹前という呼び方がなじみがある。綿の丹前をネルの下着の上に重ね着して、くつろいでいる在りし日の父の姿が目に浮かぶ。「今夜は寒いから丹前を着て寝んだ」(寝なさい)という母の声も記憶にある。しかし、こうした風景は令和の家にはほぼ見られないだろう。

では、青森県で丹前ほどのようなものだったのか。「青森県史デジタルアーカイブシステム」で調べると、昭和の衣生活における丹前の存在感が分かる。まずは寝具として、まずは

を付けた家もあった。寝具を万全に整えるのが衣生活の基本だった昔のならわしだろう。そういえば、慶弔の引き出

消えゆく丹前

美意識の象徴から寝具に



川守田礼子

八戸工業大 感性デザイン学部准教授

かわもりた・れいこ
1967年、旧福地村生まれ。東北大学文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱(ひし)刺しが研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ勤主筆。

ね技だ。旧天間林村(七戸町)では、嫁入りには布団と組む丹前5枚を長持に入れて持ってきた。ある。婚礼の引き出物に丹前

物に毛布やタオルケットを付けるのも昭和の時代には多かった。今でも押し入れや倉に、寝具類が大量に収納されているという家庭があると思う。寝具や衣服は、家で裁縫してそろえた。娘たちの裁縫習得はシャツや単衣の易しいものから始め、丹前など綿入れたらうだ。初心者は丹前の下に着る丹前下という裏地のないものを何枚も縫って練習したという。

冬が終わると丹前や毛布などは畳んでしまっておく。たぶんには紋付きや晴れ着などをしまい、長持には布団、行

た。夏の土用の頃に虫干しや洗濯をした。南部地方の三戸町では、農作業を終えた日月に「ニワシマイ」といって付き合いのあつた家を招き、「なべたんこ」とタラシをふるまった。呼ばれた人は丹前を着ていった。うだ、丹前が外出着になった。さらに面白い記述があった。陸奥湾に面した旧川内町(むつ市)の若者たちは丹前を5、6枚も持つており、夜に寝物の上に羽織り、帯を締めてずに前襟を開いて遊び歩いたという。函館丹前と呼んだらしい。完全なおしゃれだ。丹前の起源をたどってみると、江戸前期までさかのぼると、17世紀ごろにはやつた風呂屋が、丹後守の屋敷前にあつたことから略して丹前風呂と呼ばれた。そこに勤める湯女が泥手な

このように丹前は、以前書いた綿の寝入れの着物をひき寄りに配った。この丹前綿を着たかまき者と呼ばれた客たちを丹前と呼ぶようになり、意表を突くスタイルの総称として丹前風が広まった。幕府は風紀を乱すものとして丹前風目を廃棄させた。

かつてファッションの先端、先鋭的な美意識の象徴として存在した丹前が、時代を下るにしたがって愛憎し、寝具という非常にプライベートな役割にならり着いた点が興味深い。そして、誕生から370年、丹前が庶民の生活から消え去りつつある。気付かれぬうちに。

このように丹前は、以前書いた綿の寝入れの着物をひき寄りに配った。この丹前綿を着たかまき者と呼ばれた客たちを丹前と呼ぶようになり、意表を突くスタイルの総称として丹前風が広まった。幕府は風紀を乱すものとして丹前風目を廃棄させた。

このように丹前は、以前書いた綿の寝入れの着物をひき寄りに配った。この丹前綿を着たかまき者と呼ばれた客たちを丹前と呼ぶようになり、意表を突くスタイルの総称として丹前風が広まった。幕府は風紀を乱すものとして丹前風目を廃棄させた。

このように丹前は、以前書いた綿の寝入れの着物をひき寄りに配った。この丹前綿を着たかまき者と呼ばれた客たちを丹前と呼ぶようになり、意表を突くスタイルの総称として丹前風が広まった。幕府は風紀を乱すものとして丹前風目を廃棄させた。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。